

雌阿寒岳の火山活動解説資料（平成24年12月）

札幌管区気象台
火山監視・情報センター

火山活動に特段の変化はなく、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められません。
平成21年4月10日に噴火予報（噴火警戒レベル1、平常）を発表しました。その後、予報警報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・ 噴煙などの表面現象の状況（図1-①～⑥、図2）

ポンマチネシリ96-1火口の噴煙及びその他の火口の噴煙の高さは火口縁上概ね200m以下で、噴煙活動は低調に経過しました。

・ 山体内の熱の状況（図3）

96-1火口南側で実施している全磁力連続観測¹⁾によると、2009年7月以降見られていた全磁力値の増加傾向は2011年1月から弱まっており、96-1火口南側地下の温度低下が停止している可能性が考えられます。

1) 火山体の南側で全磁力を観測した場合、全磁力値が減少すると火山体内部で温度上昇が、全磁力値が増加すると火山体内部で温度低下が生じていると推定されます。

・ 地震及び微動の発生状況（図1-⑦⑧、図4）

火山性地震は少なく、地震活動は低調に経過しました。震源は中マチネシリ火口付近及び阿寒富士付近の浅い所に分布しました。震源の求まっていない地震の多くは、主にポンマチネシリ火口付近のごく浅い所に発生したと推定されます。

火山性微動は観測されませんでした。

・ 地殻変動の状況（図5～6）

GPS連続観測では、火山活動によると考えられる地殻変動は認められませんでした。

この火山活動解説資料は札幌管区気象台のホームページ(<http://www.jma-net.go.jp/sapporo/>)や気象庁のホームページ(<http://www.seisvol.kishou.go.jp/tokyo/volcano.html>)でも閲覧することができます。

※ 資料は気象庁のほか、北海道大学、北海道及び地方独立行政法人北海道立総合研究機構地質研究所のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図10mメッシュ（火山標高）』及び『数値地図50mメッシュ（標高）』を使用しています（承認番号 平23情使、第467号）。

次回の火山活動解説資料（平成25年1月分）は平成25年2月7日に発表する予定です。

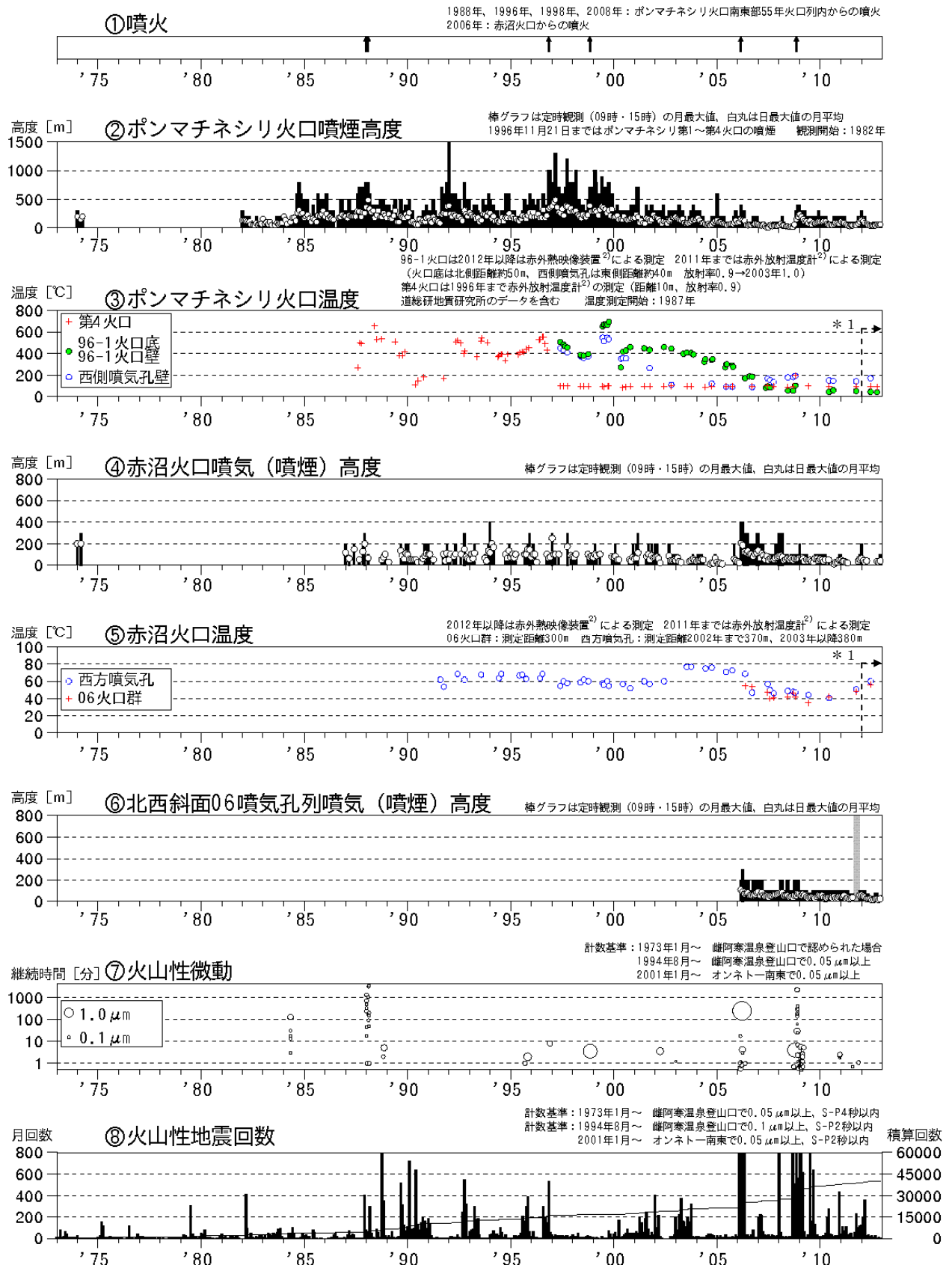


図 1 ※ 雌阿寒岳 火山活動経過図（1973年 1 月～2012年12月）

⑥：灰色の期間は機器障害のため欠測しています

* 1：2012年から測定機器を変更しました。変更した機器は分解能が高いため、同じ対象を観測した場合でもこれまでの機器より高めの温度が観測される傾向があります。

2) 赤外放射温度計や赤外熱映像装置は、物体が放射する赤外線を感じて温度や温度分布を測定する計器です。熱源から離れた場所から測定できる利点がありますが、測定距離や大気等の影響で熱源の温度よりも低く測定される場合があります。



図 2 雌阿寒岳 山体南側の状況（12月13日、上徹別遠望カメラによる）

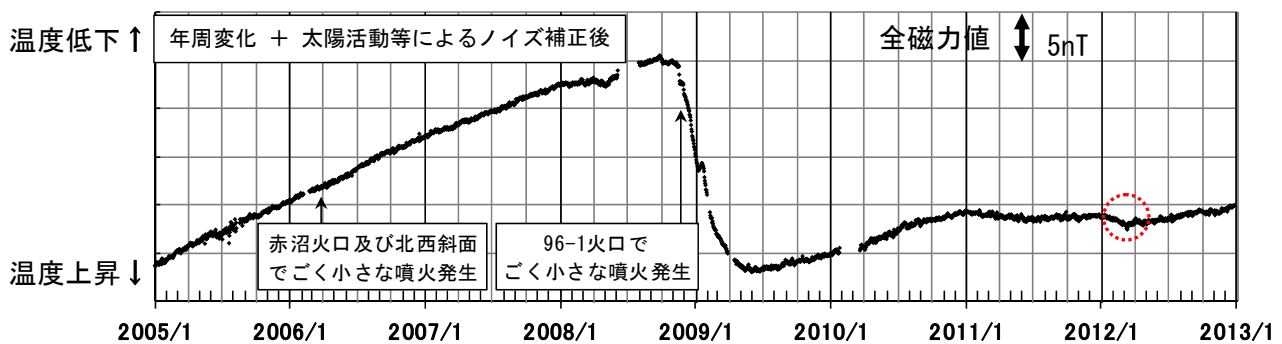
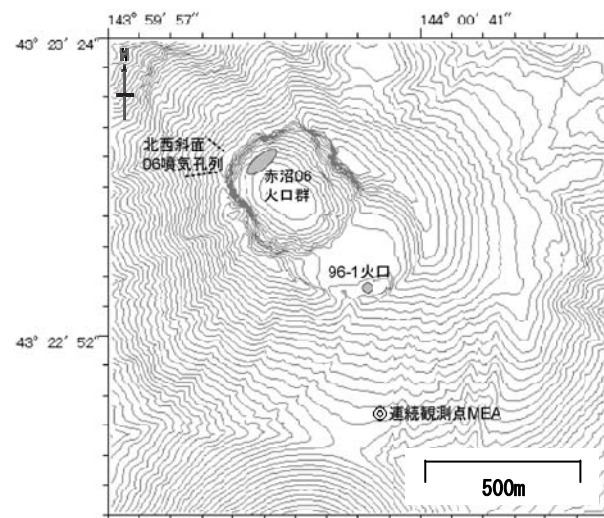


図 3 雌阿寒岳 全磁力連続観測¹⁾による連続観測点MEA（上図中◎）の全磁力値変化（2005年1月1日～2012年12月25日）

- ・ グラフの空白部分は欠測
- ・ 赤点線円内の変動は活発な太陽活動による磁気嵐の影響と考えられます

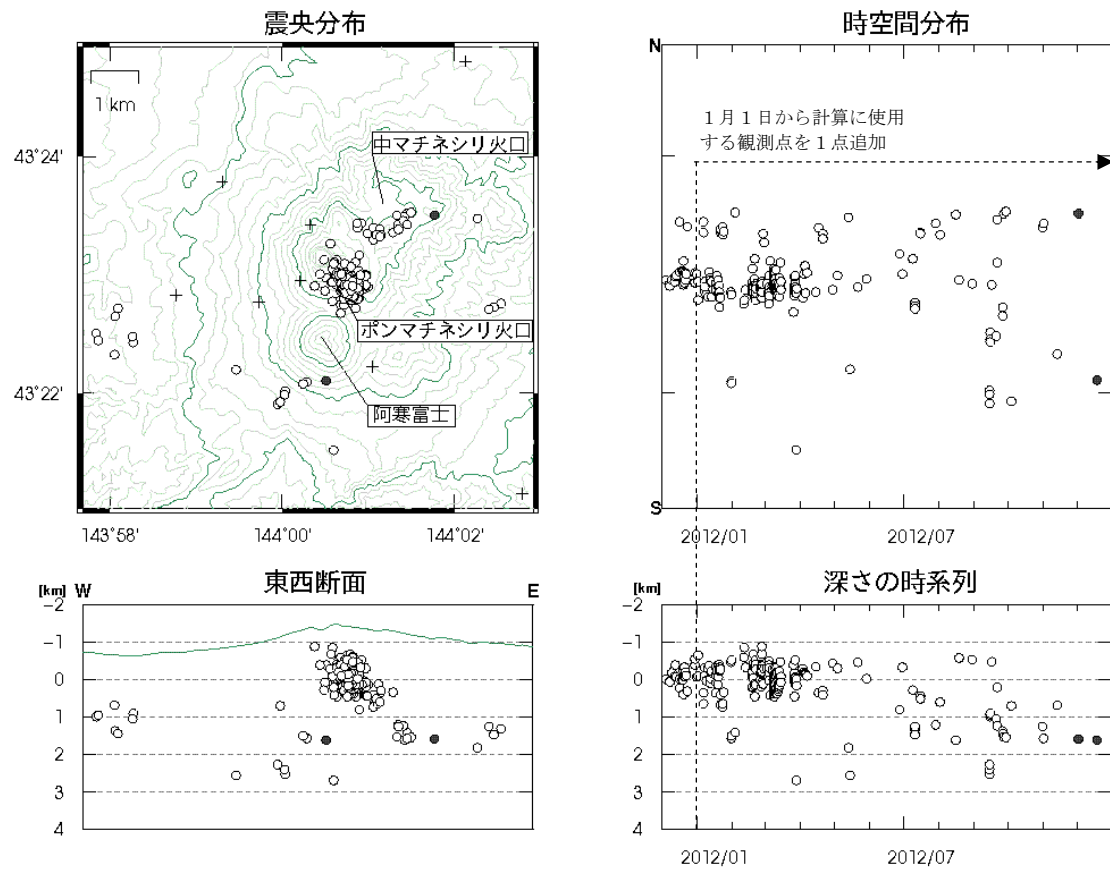


図 4 ※ 雌阿寒岳 火山性地震の震源分布 (2011年12月～2012年12月)

○印：2011年12月～2012年11月の震源

●印：2012年12月の震源

＋印：地震観測点

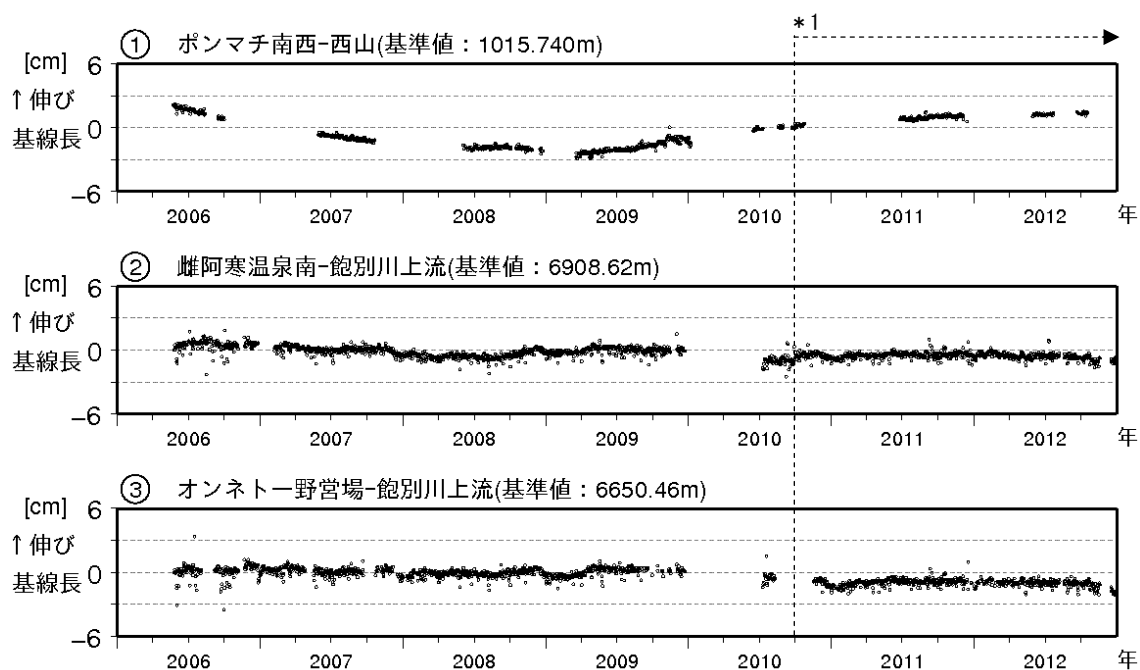


図5※ 雌阿寒岳 GPS連続観測による基線長変化(2006年1月～2012年12月)
・グラフの空白部分は欠測 GPS基線①～③は図6の①～③に対応しています
* 1: 2010年10月以降のデータについては、解析方法を改良して精度を向上させています

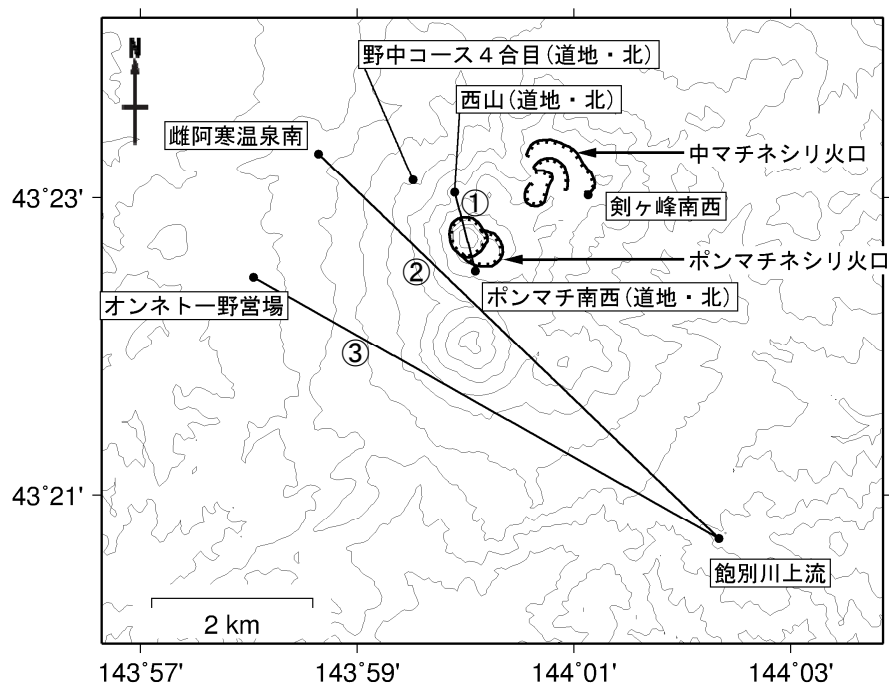


図6 雌阿寒岳 GPS連続観測点配置図
(北) : 北海道大学
(道地) : 地方独立行政法人北海道立総合研究機構地質研究所

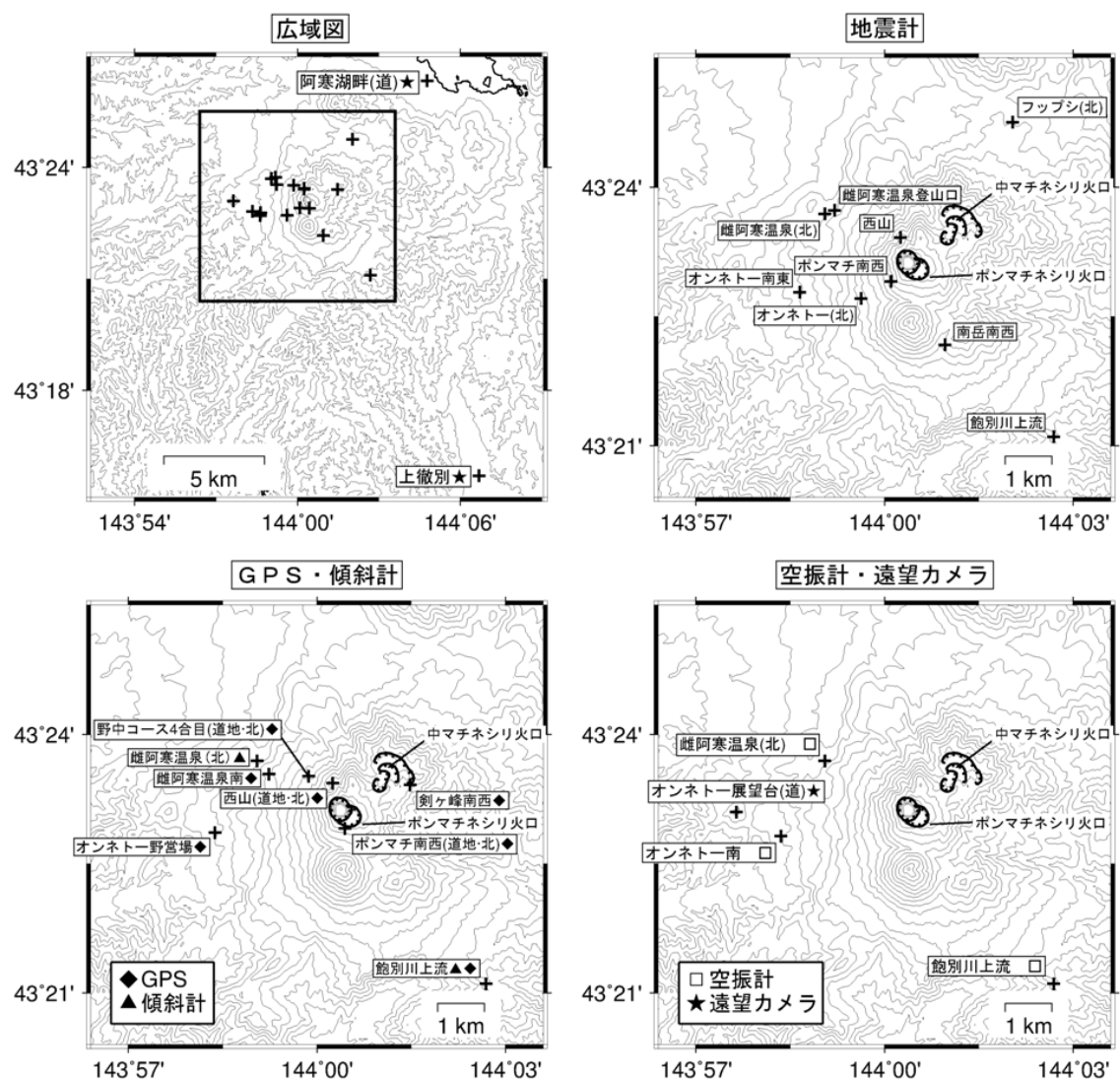


図7 雌阿寒岳 観測点配置図

広域図内の口は地震計、GPS・傾斜計、空振計・遠望カメラそれぞれの範囲を示します

＋印は観測点の位置を示します

気象庁以外の機関の観測点には以下の記号を付しています

(北) : 北海道大学

(道) : 北海道

(道地) : 地方独立行政法人北海道立総合研究機構地質研究所